

総合討論

佐野 では、早速総合討論に移りたいと思います。最初に、舞台が狭く、パネリストとコメンテーターの先生方には、段上に上がっていただけないことを謝っておきます。今回のシンポジウムは大変欲張り、各セッション、パネリストとコメンテーター5人ずつ登場していただきました。発表時間も短く、みなさん十分意が尽くせなかったと思います。それでは、進行役と同時にこの事業の推進者でもあります各セッションのコーディネーターから、各セッションにおいて、どのような討論が行われたのか総括していただき、プログラムの後半の活動にどのように反映させていくのか、約10分の時間でまとめていただきたいと思います。北原先生からよろしくをお願いします。

北原 セッション1のコーディネーターの北原です。

私のところのセッションでは、タイトルは「写実と記号 19世紀後半メディアがもたらした衝撃」ということで、最初の原信田實さんには「見えない都市 - 出来事を語る錦絵 -」で日本の幕末の錦絵『名所江戸百景』は同時代に起きた地震を読み込んだ絵ではないかという、新しい解釈を出していただきました。これは今まで言われてこなかった説です。日本常民文化研究所においてこの解釈に基づいて特別展示しております。

第2番目の話者は、イギリスからおいでになって、日本の写真史に関して色々なものをご覧になっているセバスチャン・ドブソンさんです。「写真による日本に対しての眼差しの形成」ということで、特にあのベアト、それからその後を受け継いだお二人の横浜に来て写真館を開いた方の写真を通して、日本人をどのように撮影していったか、それがどのような形で日本人というものをどのように捉えていたか、横浜絵として海外へ流通していった場合の日本の捉え方の表れだということ、お話をさせていただきました。

3番目のパネリストはコンスタンチン・ゲーバーさんです。ロシアのロシア海軍中央博物館チーフアーティストというお立場です。この海軍博物館はモジャイスキーという、幕末にプチャーチンと一緒に来た画家。当時は画家という認識はないけれど、彼は日本の状態を絵に表して報告するために絵を描いた。この個人の中に凝集されたこの時期の様々な要請と彼の興味というのがどのように発展していったのかというライフストーリーをお話いただきました。最後に彼自身はロシアでは有名な航空機の最初の設計者、最初に飛行機を飛ばすなど、発明上、科学史上の位置が大変高いというお話をさせていただきました。この三つはそれぞれ異なる形での問題ではありますが、絞る点は19世紀の日本、19世紀後半メディアがもたらした衝撃という点では、一つの問題としてくくれるようなお話をさせていただきました。

それからコメンテーターとしては渡辺俊夫さん、今日は別の研究会にご出席で欠席されているのですが、イギリスで活躍をされている美術史家です。イギリスが国力の最も盛んだったビクトリアンエッジに流布された情報というのは、ヨーロッパ全体にどのように広がったかということをご研究されているのですが、日本のイメージがどういうふうに普遍化していくか、広がっていくのかということをご披露いただきました。画像すなわち、非文字として流布したものが部分では改善されていくけれど、

基本的に最初の日本というイメージが、間違っただけのものも含めて伝わっていく様子というのを具体的にご指摘いただいた。

それから金子隆一さんは写真技術史が専門で、写真の内容ももちろんご関心がありますけれども。写真そのものが日本では19世紀後半からですが、外国ではもっと早くからダゲレオタイプとか、コロジオン湿版とかガラス乾板とかいう形で発展段階を記します。それに応じて様々に撮る対象が違ってくる。そのことを基本にしながらコメントをいただきました。特に写真としての横浜絵を中心としたドブソンさんへのコメントとして、外国の商売として技術も高い写真師が横浜で活躍する、それに対して日本の写真師もたくさん育ってくるわけですが、それはどういう関係を結んだのかということ、もう少し今後両方で具体的に研究していく必要があるのではないかと指摘されました。

以上のような形で昨日のセッションは終わりになりました。私が少し付け加えてお話ししなければならないのは、私たちのセッション1だけ、プレシンポジウムというのをもちました。これには会場からのご質問もあったのですが、なぜプレシンポをここだけがやったのかというご質問で、それへの回答になるような意味も含めてお話をいたします。実はプレシンポとしての位置付けではなくて、私は独自に自分のセッション、自分の班の活動としてこの問題を一つここで締めよう、今年度は第3年目でありますので、中間段階としての締めをしたいというふうに考えていました。

なぜ締めをするのかと言いますと、私自身がこのプログラムでもっている課題というのは災害の写真なんですね。災害の絵、災害をどのような形でメディア化していくかという時に、版画の解釈というのはすでに原信田さんをご説明いただいた通りですが、その後、日本では幸いなことに明治維新の20年くらいは大きな災害がなかったのですが、1888年に、大きな噴火がありました。それは磐梯山噴火といいます。この時にかなりの写真家が現場に行って写真を撮る。それから当時は横浜に来ていた外国人の写真家、報道員が実際に行って写真を撮る、それを本国に送りました。まだ写真の製版ができない時代ですので、石版画あるいは銅版画にして、新聞に載せるというようなことが行われていました。日本でも石版画が非常に簡単にできるということから、写真ではまだなかなか流布しない、高い、それから限定されているということですが、石版画ですごく情報が飛ぶ、そういうこともありまして、それが結実するのが濃尾地震という大変大きな災害がありました。大体7,000人くらい死者が出ました。岐阜県と、それから愛知県を中心に死者がそれだけ出ていますが、その災害が大変大きな災害だったものですから、外国にももちろんですが、それと同時に、民間に流布するというだけでなく、科学者が写真を利用しました。この段階で日本人自身の研究者が、外国から留学した人が帰って来て、地震学の専門家も生まれてきたというような段階です。ただ地震学そのものは、まだ現象としてはわかってはいてもそれ以上わからないという状況です。地震は断層の動きによって起こるということは地震学的には最近証明されたということです。科学者も自ら写真を撮るというふうなことなので、非常に多用された時代であるわけですね。19世紀のこの時期に版画から写真へということが、民間も、それからトップレベルの科学者も学術も含めて展開した。そのことが自分のテーマとしては、そしてここのCOEプログラムに加わるテーマとして持っていたものですから、それをやりたかったのだけれど、まだ災害写真というものがきちんと研究されている現状ではないのです。それでとりあえず、それに関わるメディアというものの第一線の研究者に、どういう問題を抱えているのかということをお話いただくという形でのセッションの組み方になったわけです。ですからプレシンポと

いうのを私たちのところだけで持ったという理由は、とりあえず第1段階でまとめようということがありました。その結果としてプレシンポを行い、それから本シンポにその成果をもって上がるという第2段階をとったということになります。

さて、ちょっと時間が詰まってきましたけれど、それを通してプレシンポ、それから本シンポに参加して問題になった点ということで、3つくらい挙げられるかと思います。

まず絵画と写真との共通性というのは何なのか。ということは両シンポを通じて問題になったのは、作者と制作者の眼差しということであります。何を撮ろうとしているのか、何を対象として写そうとしたか、写したか。そういう点は共通の問題として両方にかかるだろう。

それから第2の点としてでは、版画と絵画と写真との違いは何なのかということ。無意識的な、意識的な対象を選択するというのは絵画も写真もそうだけれども、写真については無意識にどうしても写し込んでしまう対象がある、これははっきりしていることではありますけれども。そういうことが非文字の資料として、現在ものすごく活用度が高い。もちろん絵画も活用度は高いけれども、それは作者の眼差しということが極めて強くひっかかる。それに対して写真の方は、無意識的なものも枠の中に取り込んでしまうという結果があるいはあるわけですので、特に災害の写真などはそうなのですが、非文字としての活用度は、圧倒的に高いものがあるのではないか。そういうことが第2点。

それから、その後者のことに関わりますけれど第3点として、ともかく技術に規定されつつそれを克服する工夫が絶えず進展している状況、これが19世紀後半の社会というものを反映するような形で映し出されてきている。特にメディア化の場合にはそうである。ということで19世紀後半という形に区切った意味というのは、その辺に出てくるというふうにとまとめられると思います。

今後の展望ですけれど、私の場合には先ほど申しあげましたように、このセッション、このプログラムで追求していくものは、災害痕跡との関係性ということにあります。ともかく、災害研究そのものは歴史研究だけではやっていけないので、様々な災害の研究を取り込んだ形で災害の全体像がわかるし、社会像がわかる。現状では災害の地面の下のことはたくさん研究されていて、おどかさような防災教育がたくさんあるのですけれど、そうではなくて災害の社会像というのが明確にならないのは、人間を対象として、人間を取り込んだ災害像が出てきていないということがありますので、今後あと残りの2年間では、現状で進んでいる地面の下の痕跡の部分と、絵図やその他、人間が関わって残された資料とドッキングさせて、社会として災害をどう受け止めているのか、それをどう克服しようとする人々の群れがあったのか、あるいは私たちの祖先がどう存在し続ける努力をしてきたか、そういうことを今後の課題にしてまとめていこうと。非文字資料に対する研究として、まさに災害痕跡はそういうものでありますし、絵図も写真もそういうものでありますので、そのような形で進めていこうと、そういうふう考えています。以上です。

佐野 はい、ありがとうございました。引き続き廣田先生、セッション2の総括をよろしく申し上げます。

廣田 セッション2のテーマは「身体技法と祭祀芸能 - 祭祀者の動きと人形の動きから -」というテーマです。COEの2班をベースにしておりますけれど、本セッションでは芸能において、身体表現が伝達

しようとする心、心情とか事柄、それが動作との間でどのような関連性を持つか、そういう疑問から出発いたしました。中国と韓国の祭祀の場で演じられる祭祀者の動き、そして元々祭祀の場で演じられて芸能化してきた民俗芸能、祭祀芸能の動きの中から、またさらに進めて本来宗教性を帯びていたと考えられる人形の動きから身体技法の特徴を捉える。そうすることで人類文化の記憶を探ろうという試みをいたしました。

まず、パネリストのお1人目ですけど、張勁松先生は中国のヤオ（瑶）族の祭祀者の身体技法というテーマで話をされました。今私が大体まとめてみましたが、あまり的確にまとまってないかもしれませんが、中国のヤオ族の祭祀者の動き、祭祀者の舞は、神を迎えたり、神を喜ばせたり、神を送るといような目的をもって行われて、その動きの中からは時計と逆の順の、回転を組み合わせ、また、東西南北中央の五方を意識しているというようなことがありました。それからまた、マジカルなステップは、これは日本でいうと奥三河の鬼を思わせるような反閤^{へんばい}があると。つまり踏みしめる、川田先生が言われるところの大地志向があるということが確かめられました。そしてまた、神霊を招聘し、呼び寄せて、使役して悪い霊を除くことを目的とした、指とか手を組み合わせをしたマジカルな掌訣^{しょうけつ}とかですね、またマジカルな字符、つまり字を、頭を使って描くといったことを実際に舞台上でご披露いただきました。それから、こういう災いを祓い清めるといような意味合いを持つ動作の他に、福を招く、豊穰を意識して行うような動作もあり、具体的に狩猟生活の様子を実演することもあるというようなこともお話いただきました。

このセッション2を通してキーワードとなるのは、除災と招福だと思います。祓い清めるといことと、福を招くという動きがとても大事なキーワードであると思います。

そのキーワードから、2番目のパネリストの方の内容をまとめていきたいと思います。2番目は田耕旭先生でいらっしゃいます。「韓国の祭祀芸能における身体技法 - 韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法 - 」というテーマでお話いただきました。韓国の仮面劇と言うのは、元々天を祀る祭りなどの伝統的な民俗祭祀とか、鬼を祓う鬼やらいの祭祀といような祭祀の場で演じられていたものが時を経て変化したものであって、その中には元来のそうした祭祀の場で行われてきた姿を未だに残している部分があると先生はお話し下さいました。この仮面劇に登場する人物を画像を使いながら分析していただいたわけですが、それを私なりに先ほど申し上げました除災と招福というキーワードから、除災と招福を象徴するような動きとしてまとめてみます。

人の名前が出てきますので、このレジュメ（大会当日配布したもの）のセッション2の所をご覧いただければと思いますが、38ページ（注：本文54ページ）から始まります。閻氏という女性が出てきます。その閻氏の手を振る動きであるとか、チャンジャマリという人物のセクシャルな動きなどがこの招福を意図するような動きだと思われれます。祓い清め、除災を象徴するような動きとして、疫神の病気の神のシシタクタギからソメ（小妹）を取り戻すような動きがあるとか、それから五方神将の動きとして手を挙げたり踏み脚をしたり回転をする動きがあるとか、それから蓮葉、蓮の葉とまばたき、これは人物の名前ですけどけれども、その面は呪眼、目にパワーがあるのだと、それでこれは本来は悪い厄神、病気の神を追いやっとな考えられるのですが、今は悪の象徴がですね、僧、お坊さんになって、それを追い祓うような表現が行われているということでした。また、これと同一に、チャイバリ（酔発）とかコクソウ（墨僧）とかいう人物も恐ろしい風貌の面をしまして、柳の枝などを用いて悪の象徴を

追いやる動作が行われるということです。このようにやはり招福と除災を目的とする動きが見いだせると思います。

さらにですね、中国と韓国において登場人物が比較できる例として、鐘馗とその妹という人物がいました。これについてはコメンテーターの方が非常に興味を持たれている点ですけれども、悪鬼を追うとされている鐘馗の妹というのは韓国では零落してしまった人物として表されます。中国では妹は魅と音通で、魅は鬼を意味するので、悪の象徴として、もしかして鐘馗の妹が追われる側にまわってしまったかのようにみえると、それから鐘馗というのも音通からハンマーと、かちんかちんとやるハンマーですけど、それと同音で、これも捕り物によって祓い清めを意味するのではないかというご指摘がありました。

それからお3人目ですけども、大谷津早苗先生は「人形にみる身体技法 - 日中の比較から - 」というテーマでお話くださいました。人形は、本来宗教性を色濃く持つ三番叟が人形操りの演目に取り入れられて、その動作を読み取ると、足を踏むこと、ビデオで見ましたけれど、足を踏んだりすることがありまして、それは地霊を鎮めることを意味して東西南北も意識しているということでした。それから人形の目が反り返ったり口を開いたりする表現がありますが、このように表情を変えるということ、赤い顔の人形が用いられているということからは、悪霊を追い払う意味があるのではないかとご指摘がありました。また、「うなづき」というのがありますが、お人形さんが首を上下にする、このうなづきが古い形式の偃齒棒式（えんばぼうしき）という形式では天を仰ぐという動きをするそうで、これは宗教祭祀儀礼などの「おこない」に見られるように面を天に向けるということにも通じて、やはり宗教的な動きにつながるのではないかとご話いただきました。

かなり私意図的に御三人の方のご報告をまとめてしまったのですが、動きの中から読み解く時のキーワードは、先ほど申し上げましたように、災いを祓い清めるということと、福を招くということではないかと思えます。祭祀芸能においては、災いを祓い清めて福を招くための動きが重要だということです。もちろん中国のヤオ族の動きには道教からの影響がうかがえます。でも、本来人類には不幸をもたらすものに対する恐れがあって、それを消し去ろう、なくそうとする、祓い清める、そのためにさまざまな動作が考え出されたものではないかと思えます。一方で、こういうふうになりたいなというように、こうあれかしという幸福を招こうとする、そういう動作も忘れてはならないと思えます。これは人類文化に記憶されて、その記憶はアジアに共通すると考えられると思えます。展望については後で。

佐野 どうもありがとうございました。コーディネーターの先生には、発表者の要旨よりも、問題点を時間の範囲内で指摘していただけるとありがたいと思います。河野先生よろしくお願いたします。

河野 セッション3は「民具と民俗技術」ということでテーマを立てました。民具と民俗技術というのはどんな関係かということ、安室先生がハードウェアとソフトウェアの関係だということ。非常に明快な理解を示していただいて、私はそれに乗ったのですが、民具というものは、道具としては非常に不十分なものも結構100%の仕事をなし遂げているということがありまして、民具の研究には民俗技術と

いうことを抜きにしては語れない、という観点から2つをセットにしたわけです。そもそも民具という概念は、渋沢敬三たちが1936年に立てた「我々同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」という規定があるのですが、それから70年たった今、見直してみる必要があるかなという事です。今回も準備過程で「なぜ民具というのか、道具ではいけないのか」とよく聞かれるのです。そこで考え直してみると、ある道具の機能、働きに重点を置いた場合は「道具」となりますし、ところが同じ道具でも、その地域性とか歴史性とかいろんな情報を持っているわけですね。そこでそちらに関心を向けて研究したいというときには「民具」と呼ぶのだということで一応の整理はできると思うのです。そういうことで今回はパネリストはお三方を立てました。まず愛知大学の周星先生からは、「中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか」ということで、日本の中には柳田の民俗学と共に、民俗学の中にもう一つ渋沢流の民具学というものがあった。いま中国では考古の文物の研究は盛んであるのと、もう一つ日本で言うと民芸に近い美的価値に重点を置いた研究はあるのだけれども、日本の民具研究にあたる部分はちょっと軽視されていることがあって、その点は日本の研究も参考にしながら今後は重点を置いていかなければならないのではないかと問題提起でした。その次は雲南大学の尹紹亭先生が「中国の犁からすきの起源・形態とその分布」という発表をいただきました。中国は東アジアの非常に農耕文化の古い国で、それでその初期の頃は石とか木とか使っていたのが、やがて青銅に変わり鉄に変わってくるという進化もありますし、初めは耒耜という掘り棒のような踏鋤があって、それがやがて犁に進化してくるというような大きな流れをつかんだ上で、中国の犁を5大分類を示された。中国の犁は実に多様でして私なんか見てもちょっとどう手をつけていいかわからないところがあるのですが、それを5つに大きく分類できるよということを提示していただいたのが、今回の非常に大きな成果だったと理解しております。次に済州大学校博物館の高光敏先生には「排泄の民俗と民具」というテーマで発表していただきました。我々はどうしても料理など食物を摂る方に重点を置いていて、排泄は見落としがちですし、経済でいうと生産ばかりを見ていて、その後にはかならず廃棄物が出てくるという点は長いこと視野から落ちていた。そのことが今大変な環境問題になっていることからすれば、この排泄というテーマ設定は、非常に大きな問題提起になります。今回は比較研究の観点から、ご自分の済州島と朝鮮半島にくっついた南海島、それから中国の上海沖の舟山島とその3つで比較なさったのですが、非常に面白いことが出てきているのです。済州島はトイレの下が豚小屋になっていて、それが人間の便がそのまま豚の餌の飼料になるという。それに比べると朝鮮半島では家畜はトイレとは別棟であって、日本と同じように排泄物は肥料にはなるが飼料にはならないという文化というようなことを、舟山島も同じなのですね。その点で少しつけ加えますと、中国の漢代のお墓の中から明器として豚小屋の上にトイレがくっついた陶製品が出てきていますが、そういう点では済州島の文化というのは、むしろ非常に中国的で、古く漢族の人たちが来たのかなという、何かそういうことまで考えさせるような大変面白い発表でございました。あとコメンテーターとして近藤雅樹さんと、それから安室知さんにやっていただきました。近藤さんは周さんの報告の日本の民具学の位置づけについて、日本の民具学は歴史的に見れば民俗学の一部としてではなく博物学的な系譜で出てきたのだというご指摘ですね。安室先生のご意見は、今後は民具ということではなく、物質文化研究で行くべきだと言う問題提起でして、その辺りは午前中の時間があれば壇上で私の意見も交えながら、大いにその討論したいなと思っていたのですが、やはり時間がなくて持ち越しております。

あと時間あればちょっと展開してみたいと思っています。そんなところです。

佐野 河野先生、どうもありがとうございました。では、セッション4の的場先生よろしくお願いたします。

的場 私どものセッション4は一番まとまりの悪いセッションです。このセッションをまとめるには、私はある時は電子工学の専門家でなければならないし、ある時は図書館学、博物館学の専門家でなければならないし、またある時は中国の歴史研究者でなければならないわけです。このように多岐にわたるテーマをまとめようとしても、個人の能力としては不可能に近いわけです。セッション1、セッション2、セッション3を見る限り、個別分野での非文字の概要がなんとなく見えてきたようにも思われます。

とはいえ全体はまだ見えていません。問題は個別の内容を、このシンポジウム全体のタイトルである「非文字資料とは何か」という問題に、どう関係させるかです。個別テーマはいささかマニアックになりすぎています。それを全体として見る眼がないか、それが本セッションのテーマです。

非文字とは何であり、それをどうデジタルとしてデータ化するのか、これが本セッションのテーマでした。この「非文字資料の情報と教育」というセッション4が最後に置かれた理由は、やはり最後に個別テーマをまとめなければならないという理由からです。しかし、これは大変なことなんです。

先ほどもセッション4の中で少し述べたことですが、非文字資料の英訳の中に「ノンリトゥン・カルチュラル・マテリアルズ」(Nonwritten cultural materials)、すなわち文化が入っているのが非常に重要な点だと思います。先ほどリュウ先生の話では、われわれの遺産の90%が非文字資料であるそうです。だから私どもが非文字資料をデータ化するという場合、私たちの遺産のうちの90%を対象にするということになってしまいます。しかし、これはもう物理的に不可能です。ですから何をポジティブに選択するかという決断が必要です。

今回のセッション1からセッション3までの報告のように、非文字資料は図像学、今回は写真でしたが、浮世絵等も入るでしょうね、それから身体技法、それから民具の三点に絞られていました。そして、今回入っておりませんが、COEの研究には「風景」もあります。つまり、すでにCOEの非文字資料研究はこの四点に絞られているのです。それは、文化といった観点から非文字資料の関心がこの四点に絞られているからです。私どもがやれることは多分それしかないわけです。だから、非文字資料といっても、何もかも扱うのではなく、この四点を中心にデータ化して入れねばならないわけです。

私自身、セッション4の報告の細かい内容についてはコメントする能力がありません。だから、先ほど時間の関係上答えられなかった質問をパネリストとコメンテーターにふる形で、それぞれ2～3分お答えいただきたいと思っております。

その前にフロアからの感想について触れさせていただきます。感想の中、こういう内容のものがあります。たとえば「フランス文化のレベルの高さを知ったというもの」。それから「中国においても様々な形でこの文化発信というものが進められていることに感心した。それに比べて、我が国はかなり遅

れているのではないかと。確かにこうした感想は、私たちの研究を発奮をさせる意見だと思います。率直なところ、今回私どものセッションでやったことは、日本社会のおかれたひとつのショッキングな状況を伝えていると思います。

私たち日本の状況は、決して遅れているわけじゃないのですが、あらゆる意味で、決して進んでいるわけではないということがセッション4の報告で理解できました。

だから、逆にいえば、私たちのこの非常に野心的な企画である非文字資料の研究というものが、本当に成果をあげるとすれば、数あるCOEの研究の中でも本当に国際的なものになる可能性があるということです。この研究によって基本ソフトが完成し、その基本ソフトが国際的に売れば、本研究は画期的な成果を生み出せるのではないかと思います。

しかし、私どもが今陥っている悩みというのは、このように「非文字資料」という大きな野心的なテーマを語りながら、今のところそれぞれ自分の細かいことしか語れていないということです。これをどう克服するかというのが、今後の問題だと思われま

そこで、先ほどフロアからの質問をお答えいただくと言ったのですが、白先生お願いいたします。白先生の方に、まず中国における文化遺産の復元の仕方についてお答えいただきます。フロアからの質問に「文化遺産をどのようなレベルで、完全にその時代のレベルで復元するのか、それとも今の形で復元するのか」というのがあります。これについて早速お答え願います。

白 先ほど、中国の民間文芸について色々なアイデアとか意見をお聞かせいただきましてありがとうございます。我々中国の民間文芸保護には、政府レベルと民間レベルでやっていることがあります。民間レベルというのが、つまり我々の仕事です。私は今いわゆる民間文芸の保護の最前線についての本を出そうと思っています。それは20のテーマに分かれた本であります。特に中国の保護の現状について論述したものであります。それを見ていただくと、きっと我々の基本的な考え方が何であるかが、お分かりいただけると思います。

それを、簡単に申し上げますと、民間における文芸は、長い間自然の災害を受けましたし、文化大革命とか政治的な迫害も受けました。都市化の進行もあいまって、先ほどのお話でもあったように保護を今急がなければならないという状態です。

保護の実態でいえば、ひとつは政府が主導のもの、もうひとつは学者や民間団体がやっているもの、それから地方のビジネスマンなど、つまり自分たちが自分たちの利益のためにやっている保護があります。福田さんとか木村さんとかがおっしゃったように、実際にはこのような保護がなかなかうまくいっていないという現状が確かにあります。我々はそれについて9つの方法をとっております。重大な被害にあるものについては、政府に申請して保護を求めるか法律によって保護することを行っています。来年の2月にはそれについての具体的発表があります。

また自治区などにおいても、その地方独自の保護政策をとっております。また規約も作られております。それから、産業という形、また学術という形の保護も、より深いレベルでやっていこうと思っています。いわゆる歴史を復元する、立て直すというレベルです。今まで、中国は文芸についての大きな破壊を受けてきましたので、中国政府として、また学術団体としても、日本、韓国などで色々やられてきたことを、国連のユネスコなどを通してやっていきたいと思っています。時間がありません

るので、簡単にこんなかたちでしか申し上げられませんが、もう一ヶ月したら先ほど言った本が出来上がりますので、それを見ていただければわかると思います。

的場 他に、ガロ先生にも質問が来ているのですが、これはまた討論の時間で、お話していただくということにします。今後の展望というのは今述べた状況ですので、実際今のところ描きようがない状態です。ただ、これまでの話を検討していく過程の中でわかったことは、私たちが非文字資料として保存すべきものは、すべてではない。では何かといえば、まず認識する側に立つ私たちがどういう価値を持って、またどういう時代意識を持って整理していくのかという問題を整理する必要がある。多分価値は時代によって変わりますから、入れるべきデータがやがて変わることはあります。しかし、とりあえずわれわれのおかれたこの時代の意識というものをに入れていくという方向が一つあるのかなと考えています。そういう形でデータを整理していかないと、雑多な資料の寄せ集めになる。日本語でガラクタと言う言葉がありますが、どうしようもないガラクタの資料の寄せ集めになる。果たしてそれでいいのかどうか。ですからそのあたりの整理方法というものを、今後方法として確立する必要があるのかなと思いました。以上です。

佐野 1から4まで各セッションの総括をしていただきました。今日は各セッションとも積み残しがだいぶあると思いますが、どうしても今日の総括、あるいは話の展開上で必要な指摘がありましたら、少し時間をとります。各セッションからどうぞ。あるいはパネリストの先生、コメンテーターの先生、今の総括に対してのご意見、あるいは討論で取り上げたい問題がありましたら言って下さい。よろしくをお願いします。

的場 多分今日来られている方にとって、大変興味がある問題だと思われます。ちょっと先ほどセッション4で触れられた質問にもどりますが、橘川先生からの質問の中に、ガロ先生の学校では、ごく普通の日常的なものの維持・保存というレベルと、そして非常にレベルの高い美術的に貴重な、たとえばモナリザのようなレベルの修復の仕方の違いについてどのように教えられているのかという質問がありましたので、まずこれにお答えいただけますでしょうか。

ガロ INP（パリ国立文化遺産研究所）で行う研修は専門家向けのトレーニングです。ですから学生たち、それぞれの研修生たちは、まず、INPに来る前に学術研究の分野、特定の分野で専門の勉強をする必要があります。入学するのは専門の勉強をしてきた人たちだけなんです。まず修士号はとっている。つまり歴史あるいは美術史、科学史、考古学といった分野をすでに修めてこななければなりません。ですから、まずこの最初の段階のトレーニングが専門的なものです。そしてINPにいったん入った後、まず共通コースがあります。全員共通の講義を受けますが、もう一点、特定の専門性の高いコースも受けます。これは将来的な専門分野に分かれて行われます。さらに私がセッションで申し上げました、現場での実習ですけれども、これも義務なんです。国内、あるいは海外で行うことになりますが、これもやはり専門分野に分かれて研修を受けます。ですから例えばエコ・ミュージアムに行く人たちは

トレーニング全体が、例えばルーブル美術館に行く人たちとは違うわけです。ルーブルに行く人たちはモナリザの責任を持つわけですから、トレーニングの仕方は全く変わってきます。ですから、INPでのトレーニングはこれまで受けた最初のトレーニングを補完するものであって、大学で受けた教育の上に積み上げられるものであります。例えばルーブル学校ですとか、古文書学校で受けた勉強の上に積み重ねられるものです。ですから、これは美術館に行くのか、エコ・ミュージアムに行くのかでトレーニングが違います。ただ、トレーニングを受ける研修生達にはやはり共通なアプローチはもってもらいたい。つまり保存をする、そして文化遺産を守るということについての共通の認識を持ってもらいたい。その価値観についてはしっかりと同じ共通の認識を持ってもらって、そこから先は特別な特殊な、専門性の高い能力をつけていただくように組んでおります。これでご理解いただけますでしょうか。

的場 この私も、ガロ先生の学校に昨年お邪魔したのですが、そこではもう一つ、マネージメント、いわゆる保護とかそういうレベルとは違う、マネージメント、経済学や経営学の勉強も教えられているというのを聞きました。ただ単に細かいテクニカルな問題だけではなくて、もっと総体的（ゼネラル）に物事を判断する能力、いわば大学院レベルの、そういう能力というものを養っている。これは多分神奈川大学でも参考にしなきゃいけないことなのかなと感じました。以上です。

佐野 質問は、セッション4の方から始まりましたので、次に河野先生のセッションでは何かご指摘がありますか？

河野 ちょっと佐野先生に全体の時間の使い方についてですが、どういう感じになるのでしょうか。

佐野 時間の使い方ですが、大体の割り振りを話しておきます。最初に、コーディネイターの先生に、各セッションのパネリストとコメンテーターの先生方のご意見を総括してもらい、議論を始めました。今回のシンポジウムの趣旨は、パネリスト、コメンテーターの先生方の指摘を受けて、プログラムの今後の調査研究に活かしていくことですから。大体4時までその質疑応答を続け、4時過ぎぐらいから自由に、総合討論ですから、フロアの方の質問も交えて進行します。フロアからの質問は、非常に個別的なものとかかなり一般的なものに分かれています。これは後半に取り上げたいと思います。

河野 ではセッション3では、安室さんから今後は民具という捉え方をするのか、物質文化でいくのかとの問題提起がありましたが、その点について周先生はどのようにお考えでしょうか。

周 中国の民俗学の中では、民具学という言葉がないんです。そしてまた私は民俗文物という言葉を使いたくないということがあります。ですから物質文化研究というのは、この二つを含めているということで、そういうふうに使いました。

河野 ありがとうございます。民具という概念については、私と安室さんの意見がまた若干違うんで、

私なりの意見をちょっと出させてもらいますと、私はやはり民具にこだわっていることがあるのです。その一つは、日本の場合は民具という言葉が現実には定着していて、各市町村で寄贈を受けた農具や生活用具を大たい民具と言っている。そしてその民具がいま大変危ない。「平成の大合併」といわれる市町村合併がものすごい勢いで進んでまして、そうなるのだぶった民具は嵩が高いし同じものは要らんから棄てようやないかというのが話題になっていて、現実には焼かれたという話も聞いています。この場面では「民具は大切だよ」という訴えかけをやる必要がありますね。もう一つは民具の持っている情報は、物質文化に限られるかということそうではなくて、私がやっている犁の比較調査からは、もろに古代の政治が見えるのですよ。大化の改新であるとかアジアの激動によって渡来人が来て、それが日本の犁耕の始まりとなっている。そういったアジア規模での大きな政治のうねりまで見えてくるものを、「物質文化研究」といってしまえば、かえって自分たちの視野を狭めてしまうのではないかなという危険を感じているところです。こうした意見の違いは今ここで結論出す必要はなくて、安室さんは安室さんの立場からやっていただいて、私は私の立場を保ったまま、お互いがそういう立場の違いを理解しながら研究を進めていくのがいいと思っています。

佐野 この問題は大事ですね。先ほどから、韓国の民具とか中国の民具という言い方がされていて、民具研究はナショナルスタンダードなのか、物質文化研究はそれとは一線を画しグローバルなスタンダードを求めていくものなのか、問題になると思います。

河野 その点で言うと私はやはり韓国の民具、中国の民具、日本の民具という括りは当面非常に大事だと思うのですね。それぞれの国民は、長いあいだそれぞれ違った政治・経済環境の中で生きてきた以上、その括りごとの特徴というのは非常に大きいので、私は有効だと思っています。インターナショナルというのはコスモポリタンになることではなくて、それぞれの自分の立場を堅持しながら交流するのがインターナショナルですから、韓国の民具、日本の民具といった括りは、私は意味があると思っています。

佐野 それではセッション2の廣田先生、お願いします。

廣田 全体と関わるものは、こちらの方に質問でいただいている記録の問題があるのですが、それは後で話させていただいて、セッションの中でお二人のコメンテーターが、康保成先生と山口先生の両方が共にご質問なされたことがあって、それが積み残しとして一つありますので、その点について田耕旭先生にお尋ねしたいと思います。それは、今度張勁松先生にはヤオ族の祭祀者の演技をお話いただきましたけれども、田耕旭先生には韓国の仮面劇についてお話いただきました。中国にも仮面劇があってその中で鬼やらいの意図を持って登場する人物で鍾馗という人物がおります。日本でも五月に鍾馗様の絵を飾ったりしますが。その鍾馗が韓国の仮面劇にもある、鍾馗というか鍾馗の妹が仮面劇の大事な人物として出てくる。ただその人物がかなり本来の意味よりは零落してしまっている。中国でも鍾馗がその妹をお嫁にやるというような内容の仮面劇が演じられるのですが、韓国の鍾馗の妹のソメはなぜそういうふうにならなくなったのか。もしかすると追われる鬼というふうな事につながっ

たのではないかというコメンテーターのご質問があったものですから、その辺田耕旭先生にソメの話をお聞かせいたしますとありがたいです。

田 昨日この質問は出たので少しまとめておきました。それをちょっと読ませていただきます。中国では唐以前ですね、宮廷の儺礼で方相司^{ほうそうし}が悪鬼を追い払う主役でありました。しかし、唐以後では悪鬼を追い祓う主役が鍾馗^{しゅうゐ}に変わったと思います。そして鍾馗の以外にもソメとか判官、僧、竈神などが新しい配役として登場しました。ここでのソメは鍾馗の妹さんですね。しかし韓国の朝鮮時代の宮廷儺礼では鍾馗は出てこずに、方相司が出ています。しかし中国の宮廷儺礼を模倣した韓国の宮廷の儺礼でもソメ四人、それから判官四人ですね、僧、さっきも申し上げましたけれども、竈神四人などが全て仮面を被って出てきます。これで韓国の儺礼では仮面を被った人たちが約60人くらい出てくるんですけれど、その人たちが疫、悪鬼を追い祓ったと言います。ソメも鍾馗の妹さんです。このソメが仮面劇では妓生（妓者）として役割が変わったということです。

それで儺礼を演じた役者たちがいますね、その人たちが後で遊びを、仮面劇を作るんですけども、新しい遊びを作ることによってソメがそういう妓者として世俗化される、そういうものとして変わっていきました。伝来の記録としては1770年代の記録があります。以上でよろしいでしょうか。

廣田 はい、ありがとうございます。

佐野 セッション1の方から…。

北原 セッション1で先ほど簡単なまとめをさせていただきましたけれども、私は今日のセッション3の「民具と民俗技術」のお話で、実はこの国際シンポジウムで色々な取り組みをずっとしてきたわけですが、その過程で先生に何で道具って言わないのって聞いたのは私なのです。それは民具でなければならぬというふうにおっしゃったのですが、その時はそうなのかなと思っていたのですが、今日ご報告を聞いて、民具と民俗技術の関係で、民具というのは不完全のものだけれども、それを人間の活動で補って一つの問題として総合的に把握できるのだというお話をうかがって、納得したわけですが、実は絵画でも、それから写真でも技術というものが非常に深く関わっているわけで。定着した二次元の作品としてはそうですが、特に19世紀の後半の写真というのを日本の方でみますと非常に転換しているわけですね。そして展開が早い。その技術をどうやって補うか、どうやって大衆に広めていくのか、どうやって儲けるかということではすごく工夫をそれぞれしているわけです。

ですからそういう意味ではデータベース化という問題でも、技術というものが定着した結果としてデータベース化は可能ですけれども、どういうふうにかこの形のない技術というものを、技術そのものをデータベース化するのかというのは、これは能登先生のお話でもあまり出てこなかった。能登先生のお話の用語は私にはよくわかりませんが、結局文字化して伝える、何かの対象を文字に分解して、それを基本にデータベース化するのかなという、なんか漠然たる理解しかできないですけれども、映像そのものを基本的にイメージで、それを索引の要素にして検索するというふうな方法っていうのはまだ発見されていないのか、考えられていないのかということをお伺いしたい。

もう一つはその技術という点で、今回展示をやっております『名所江戸百景』の場合には、あれは復刻版なんですね。なぜ復刻版を作らなければいけなかったのか。伝統工芸技術技能協会、職人さんの団体を作って、文化庁から大変なお金をいただいて、顔料も含めて復刻するということなので、技術が絶えていくのをそこでストップさせて、定着させようというのが結果であります。私もその辺の事情を私は詳しくありませんので、原信田さんにちょっとお話いただきたい。それから新聞で報道されたということもありますけれども、普通の方々があの絵に対して親しみを持っている。色々なおばさん達がたくさん来るんですよ。私は本当に意外で、こんなに大衆に支持されてきているのかという点で、絵の価値というか大衆普及度というか、そういうものもびっくりする次第なのですが、ちょっと原信田さんに、技術の伝承という点でなぜ復刻する形に至ったのかについてご存じであれば、その辺を非文字との関係でお話いただければありがたいのですけれど、よろしいでしょうか。

佐野 では、原信田さん手短かによろしく申し上げます。

原信田 詳しい事情はわかりませんが、摺師さん、あるいは版元の方にうかがっていると、昭和50年代に摺りの名人と呼ばれている何人かの人がいらしたらしいのですが、そういう方がばたばた亡くなってしまって、ようするに明治から大正にかけて残された伝承が途切れてしまったという事情があるようです。いくつか版画の復刻ということを試みてきたらしいのですが、その中でなぜ『名所江戸百景』かというのはちょっとわかりませんが、そこに白羽がたつたと。それで東京伝統木版画協同組合というふうになんか名前が変わっておりますが、そこが全体として取り組もうとした。今朝もちょうど摺りの実演を見ていました。色がちょっとずれた所がありましたら、さっそくその場で摺師の人が見当を付け直して直していた。あるいはばれんについても色々な使い方があるというようなことをうかがっていますし。版画は一つの制作物ですけども、版画という作品が出てくるまでの技術という、使い方のレベルでやはり人間の手が加わっているっていうことは実感しました。

それから記憶と記録、渡辺さんが言っていたと思いますが、記憶と記録という点で、私が説をたてたのは安政の時の記録なのですが、今北原さんがおっしゃったように、今の人間でも結構支持してくれると。そこにある都市の記憶っていうのは何なのかっていうのは考えてみてもいいかなというふうに思っています。

佐野 復元の問題は、先ほどセッション4の方でも出ていました。例えば民家移築の場合など、建築当初の復元を目指すのか、あるいは今住んでいる、つまり現状を再現するのか議論のあるところですね。それでは、これで総括とそれに対する質疑応答を終わりにしたいと思います。時間をとりましたが、両日参加されていない人、セッションによっては聞いていない人もいますので、大体こういう議論が行なわれたことと了解してください。

前にも言ったように、私たちはパネリストの先生とコメンテーターの先生のご意見を受けて、これを今後活かして行きたいと考えているわけです。ですから会場の都合とはいえ、私たちが上の席にいて、皆さんが下の席で、先ほどから心苦しいです。なにか変ですが、先生方どうもありがとうございました。

これから総合討論に移ります。コメンテーター、パネリストの先生方に質問がきています。まず個別的な3つの質問を紹介しておきます。大谷津先生には、「うなづき」について信仰性というか、「うなづき」の背景をもう少し説明していただきたいと。それから、尹先生、河野先生の両方にもかもしれませんが、中国の少数民族の犁、チベット族や彝族の犁の形態の差、その意味するところを簡単にまとめほしいというものです。高先生には、臭い話ですけれども、大小便をバケツにする事例はどう位置づけるのかと、詳しくは後で質問紙を読みますが、以上の質問がきています。

最初に注文ですが、ここは、個別的な発表、学会の場ではありません、回答は、人類文化とは何か、非文字資料とは何かというようなCOEプログラムのコンテキストに沿って答えて頂けるとありがたいです。特に犁の問題など具体的に一つ一つ説明していくと大変時間をとることになってしまいます。

では大谷津先生からお願いします。質問紙読んでみます。「うなづきの信仰性を指摘しているが、もう少し具体的に検証して欲しい。」二つ来ていますが、一つを代表させ読ませていただきました。

大谷津 はい、うまく答えられるかどうかわかりませんが、「うなづき」の信仰的な意味合いということと言いますと、「うなづき」には本来、信仰的な意味合いがあるのではないかという仮説をこの場でちょっと大胆に述べさせていただいたわけで、その類例ですとか根拠となるものが多少少ないというのは、いわゆる想定内ですね。今のような疑問があるのは想定内です、これから事例を集めていかなければいけないことだとは思っております。ただ、初期的な「うなづき」の形式、いわゆる人形の「うなづき」は、写実的な「うなづき」ということではなくて、上を向くという、天を仰ぐというその形状・動作で、これはどう考えても「うなづき」とは言えないというところに初歩的なというか最初の疑問があって、これは今でも解けないわけです。それを解釈するとやはり信仰的な意味合いと解釈した方が自然なのではないかというふうに思っております、それを言うための事例というのはもう少し必要かもしれません。この後いわゆる文楽の人形芝居になっていきますと、そういった信仰表現というのは消えていくわけですね。まさに人間が動くような舞踏的な表現であったり、リアルな対話であったり、そういうような演技が磨かれていくわけで、いわゆる偃齒棒式のような「うなづき」の動作というのは消えていくわけですが、初歩を辿っていくと、本来の姿を辿っていくと、そこには信仰があるのではないかというふうに、まだ仮説の段階ですけれども今でも思っているところです。先ほどの技術という点でいくと、頭は数は少ないんですけど、偃齒棒式の頭は点々とあるわけです。しかし使う人はまずなくて。あの使い方があったからこそ、上を向く、天を仰ぐという動作がわかったので、あの事例がヒントになって今のような仮説を立てたというような状況でございます。

佐野 どうもありがとうございました。それから犁の問題ですね。大変長い質問を書かれておりますので、会場に質問された織野さんおられましたら、質問の主旨をまとめて話していただけるとありがたいと思います。おられますか？

織野 すみません、じゃあ簡単に申し上げます。一つは中国の唐犁の中でも秦嶺山脈以南の唐犁の中に犁轅の彎曲した、しかも犁柱のないものが分布しております、これがいわゆる少数民族である彝族な

どが雲南あたりで使っていて、それがまたずっとインドとか西アジアにつながるような、いわゆるチベット犁と非常に似た彎曲をしております。河野さんは中国の唐犁の犁轆の彎曲については技術的な意味で意図的に彎曲したんだというふうな技術論な方向で言っていらっしゃるんですけども、もちろんそれはそれなりの根拠があると思います。ただ特に西南中国のものについては、ヨーロッパの方にも広がっていったいわゆる彎轆犁といわれるものの影響が読み取れる可能性がまだ十分残っていると私は思っております。その辺のこと、尹さんはどう思っているか。また中国の南西部に韓国の犁とよく似た三角枠の犁があります。その理由は何か。

それからもう一つは、中国では非常に古い犁先が出ていて、いわゆる人力犁の段階というのは非常に長くあったといわれますが、ただ畜力による牛耕の段階というのは、今のところ春秋時代であるということになっておりますので、それを含めて考えると、やはり牛耕は西アジア起源という定説でいいのじゃないかなと私は思いますので、牛耕というのをまず考えた上で、論じられる必要があるのじゃないかと思っております。この2点について、できれば御二方に簡単にお願いしたいと思います。

佐野 これは簡単にもいかないわけで、織野さんはこういう犁の系譜図も提示されておりますので、専門の民具学会だとか何かで議論していただいた方がありがたいと思います。

それで尹先生にはもう一つ、犁に関するっていうか、踏耕について質問がきています。日本の波照間では雨が少ないので、乾燥を防ぐために牛に踏ませてつるつるにするんだと、そういう形は他にありますかというものです。これは簡単に答えられると思っておりますので、宜しくお願いします。

尹 織野先生でしょうか、ありがとうございます。最初におっしゃいました彝族の犁、そしてチベット族の犁との違いですけども、これは一緒になっているところがありますが形はただ全く異なります。我々の調査によりますと、なぜかという理由を説明できます。チベット族が犁耕を行う所というのは高原ですけども大変平坦な所です。しかし彝族は山の上に住んでいます。また色々移動をするんですね。ですから彝族の犁というのはとても短いんです。それが一つの理由です。もう一つ犁には民族の特徴というものがあります。例を挙げますと、チベット族のその中甸の地の犁は、ナシ族の使っている犁と形の上でとても似ています。しかし山を越えてインドの方へ行きますと、またインド系の犁にとっても似てくる。ですから民族性はありますけれども、一つの民族全員が全く同じ形を使っているというわけではありません。あとはもう一つのご質問、なぜ中国の南西の三角枠の犁が韓国の犁と似ているのかについては、我々はお互いにどのように伝播して影響し合ったかということを考えることでなく、人類というのは同じような地理の環境に置かれれば、同じようなものを生み出すのではないかということが背景にあるのではないかと思います。たとえば雲南と中国の東北地域というのは数千キロと離れた全くなんの関係もないようなところですけども、ある農家の形は大変似ている、全く同じだということがあります。また下駄のような履物も、日本のものとハニ族の下駄は大変似ております。また犁轆の彎曲した犁についてでありますけれども、チベット高原はとても土壌が薄く、また石が多いということですので、少し曲がっていた方が浅く耕することができます。ですから柔軟に物事を捉えると、その理由は見えてくるのではないだろうかと思っております。

佐野 質問者の織野さんには、失礼をお詫びしますが、また相互にぜひ交流をしてください。それで高先生には、「排泄物の処理は現在では地球環境保全のためにも重要な課題ですが、水洗トイレが最善ではなくなっております。アジア的循環型を病原菌と寄生虫とを除去して利用することが大切です。この時に大便と小便を分ける事が必要で、濟州島のトイレでは大と小を分けて処理・利用しているのでしょうか。小便も利用していますか。」という質問が、日本トイレ協会副会長である高橋さんから来ております。

高 大変ご専門的なご質問で私が答えられるか心配ですね。人糞については肥料としての利用と餌としての利用で分かれていますね。肥料で使う桶厠式の舟山島では、大小は分けませんね。朝鮮半島の土厠式では小便は地下にもぐってしまうから分けますね。小便専門の民具もありますから。私のふるさとの濟州島では人間の小便は豚は飲まない、食べませんね。濟州島ではこんなことわざがありますね。昔の寺子屋の先生は給料が無い。給料は寺子屋の子どもの小便だけだと。こんなことわざがありまして、ここから小便は大切にしていたということはわかりますね。以上でよろしいですか？

佐野 はい、どうもすみません。日本ではですね、肥料の関係もありまして、割合と大便、小便をきちっと分けるといことがあります。先ほど、セッション4の的場先生がテーマの「非文字資料とは何か」について、その問題点をまとめてくれましたが、そこにはなかなかたどり着きません。急ぎ、一般的な質問に移りますが、大きく二つに括りたいと思います。

一つは、非文字資料と文字資料との関係性です。もう一つは文化資産というか、今日ガロ先生にも発表して頂きましたが、文化資源というか、文字情報も含めて、いわゆる文化情報をどのように発信していくのかという問題です。

まず、原信田さんに対して、「見えない都市の対概念は何か、見える都市があるとすればそれはどういう都市なのか、二つを区別する基準は何なのか」との質問です。先ほどの渡辺先生のコメントの中でも、文字情報と非文字情報の兼ね合いが原因で、東大寺がロマネスクの建築になってしまう例が紹介されました。それから、アラン先生に文字と非文字の関係についてももう少し補っていただけるとありがたいです。

的場 文字と非文字の関係といっても、まずリュ先生の考えられていることを…。

佐野 そうですね、先ほど少し取り上げられたのですが、もう少し。

的場 リュ先生の考えられている文字と非文字の概念の違いということについて少しお願いいたします。

リュ そうですね、主要な点として私が指摘したかったのは、近未来にはおそらくは、学生を含めて私たちは、論文を書く時に、まったく新しいやり方で書くのだということです。どういう意味かと言いますと、近未来にはwebに入って、イメージ、あるいは音声を取ってきて、そしてそれにコメントを付けたり、書いていこうということ。実際もうwebで本を書くじゃありませんか。そしてマル

チメディアはもう本を自分で作っていくと思いますよ。ですからこの非常に大規模なデータベースが今作られている、あるいは皆さんも作っているわけでありませぬ。

COE のデータベースは2、3年で作られるんだと思いますけど、これを学生が使うことになると思います。そして世界中の教師とか学生がリサーチのために使い始めると思います。この研究で何をするのでしょうか。たんにコメント書くためだけではないですよ。音声も使っていくでしょう。データベースの中にも入るでしょう。そしてイメージも使っていくでしょう。データベースは使われるために作るのだと思います。

今の段階では、教育、研究で使われるだろうと強調したわけで、非常に具体的な例がありますよ。例えばビジュアル文化ですけれども、私の CNRS のリヨンの研究所（東アジア研究所）には特別なプログラムがありまして、web に映像を公開しているのです。19 世紀末の上海、北京の映像を紹介しています。これは UC のパークレイ校と協力してやっているのですが、つまりカリフォルニア大学とです。この研究所の web サイトにいかれましたら、どんどん資料がとれるわけでありませぬ。その写真がとれるんですよ。そしてまた共同セミナーをやって、リヨンとそれからパークレイがやった共同セミナーで、マルチメディアの教材を使いまして研究をやったりする。この共同研究の結果もっていただけるわけでありませぬ。

従いまして十分可能性ががありますよ。神奈川大学も、ここに何か追加してください。日本の 19 世紀末の写真を入れられるとか、これも十分可能です。これこそマルチメディアのデータベースというものであります。そして使うために作るわけでありませぬ。自分の研究のためにこれからどんどん使っていくことになるでしょう。ただ書かれた資料というのはデジタル化して web に載せるわけでありませぬ。そして非文字もそうです。だから web では二つの違いがどんどん収斂してきます。そして研究に使うということでどんどん収斂すると思います。だから Web 上では、文字でも非文字でもそんなに違わないと思います。

書かれたものをスクリプトと呼んでおります。原稿というものは、例えば技術を学ぶときの考えの支援でありますね。そしてスクリプトというのは書くという意味もあります、書くということには歴史的に色々なサポート、支援がありました。今この段階で書くこと、つまり writing に新しい意義が与えられようとしております。新しいサポート技術が出ようとしているわけでありませぬ。ですから私は writing、書くことということ、すなわちです、サポートする技術から自由になって、もっと拡大した writing、書くことというのを私は提供したい。まあ、ずいぶん新しい考え方かもしれないけれど、私たちは本当に普遍的に、あるいは多角的に考えていかなければならない時代に来ているんですよ。

的場 いいですか、今の話だと、私たちが非文字という形で文字から区別される世界を規定していること自体が、実はある意味では時代の流れに逆行しているのかもしれない。web 上では文字も非文字も同じ空間の中に入っているわけですね。そういう意味では分けることにこだわるよりも、データ集積としてどのように利用していくか、さらにどういうふう文化、社会というものをそれによって捕らえていくか、この方向に問題を移すべきかもしれない。だからそのあたりの方の問題に関心を移して、文字資料だとか、非文字資料だと細かく分ける必要は必ずしもないという話じゃないかなと思います。これは多分セッション 4 にとっては大きな問題提起だと思いますね。

佐野 どうもありがとうございました。我々のプロジェクトの中には、文字資料、歴史情報を扱っている先生も多いものですから、非文字資料との関係は一度はきちっと議論しておきたいのです。原信田さんに浮世絵における字の部分と絵の部分の関係についてもう少し補っていただきたいのですが。

北原 今、文字と非文字の関係性が境界はなくなるというお話なんで、原信田さんが版画を見ていて、文字情報で解説する部分と、それから絵柄で解説する部分がありますよね。そういうものの関係性というか、版画の一枚の中でどういうふう考えたらいいかというふうなことではないのかと思います。どうですか。難しい？見たとおりだ？

原信田 いや、違うことを考えていたので。的場さんの話されていたことを考えていて、結局情報発信、名所江戸百景をweb上にのつけた時に画像そのものを見せるということは一つあります。それに対してどうしたって文字をくっつけて説明しない限り、分かっただけないってというか、こちらの伝えようとする意図が伝わらない。じゃあどういうふうに表示するんだっていうことをちょっと考えていたので、佐野さんの言っていることとはちょっと違うと思うのですが、ようするにweb上の表し方ということですよ。それは多分一番大きな問題ですよ。あるものをWeb上で表現し、伝達することは、そこに価値観を含んでいますよね。その価値観、多分出す側の意図というものをどう表現するか。当然それは見る側の意図と交錯するわけですけども、多分そのあたりの部分でどこまでやれるかということと関係するんじゃないかと思いますけれどね。いいですか。

今回の展覧会でも、私の説に基づいて展示しているという形になっています。ですから今的場さんが言われたように、ある切り口から、っていうかある価値観で見せています。従来の価値観とは違うよという提起ではありますが、そういう方向に誘導しているわけですね。当然web上でもそういうふうになると思います。そうした時にそれでいいのかどうかということがあると思うのです。

北原 けれども、もの自体は全く別の見方も可能なわけで、そう切り取られたものに対して、web上で公開するアクセスの量ってというのはものすごいわけでしょう。予想としては。だからそういう意味では一つの切り口で提示するということが犯罪ではないですよ。これはどう思うのですか。

原信田 だから、見せ方をどうするかだと思うのです。こちら側の意図はこうだよと言ってもアクセスする側がどんどん裏切っていきますからね。というか、こちら側の意図よりもアクセスする側の価値観によって、こちら側の提示したものがどんどん壊されていっちゃうのじゃないかって気もしてるんですけど。

北原 それは喜ばしいことではないですか。

原信田 もちろん。だからこちらが制限しても制限しきれないなと考えています。

佐野 テーマがテーマだけに、まとめにくいですね。先ほどからどう方向性をつけたらいいのかと汗をかいています。このシンポジウムのテーマは「人類文化研究のための非文字資料の体系化」ですが、今回はその中の「非文字資料とは何か」に力点を置いて、議論を進めてきました。しかし、人類文化研究、体系化も大きな問題です。この体系化をどう考えたらいいのかに関係した質問も寄せられています。個別的な質問から、さらに一般的、もっと抽象的な議論に進まなければならない段階になって来ました。身体技法について中国、中山大学の王暁葵さんから「身体技法について日・中・韓などの学者はそれぞれの記録方法、専門用語に基づき説明をしていたが、非文字資料として体系化、記号化する際、統一した記録法、手話、記号概念などを検討することは可能でしょうか」と質問が来ています。また、おそらく能登先生に対する質問と思うのですが、「機能や概念が同じでもデザインは出てきます。デザイン、意匠をどのように位置づけるのかを教示してください」とあります。

このプロジェクトのテーマは、いずれにしろこのような短時間で回答できるわけがなく、みなさんのご意見、お知恵を拝借したいというのが今回のシンポジウムの基調です。このテーマを専門に扱う文化人類学という学問もあり、長年の蓄積があるわけですが、しかしそこでも一つの結論があるわけではない。それぞれの立場があるということですから、とてもこの一回のシンポジウムで、何か結論めいたものを出すのは無理だということは分かりきったことです。

そこで最後に、基調講演をしていただいた川田先生に、時間もわずかになりましたけれども、今までの総括、あるいは個別的な質疑応答も含めまして、基調講演に対する対応としての回答をお願いしたいと思います。

川田 今度のシンポジウムでいろいろな方面から多様なトピックが出されましたが、今後の問題としては二つあると感じました。一つは4つのセッションで出された問題を相互にクロスさせて考えていくということ。それから第2に、もう少し視野を広げて考えてみたいということです。今度のシンポジウムのテーマは「非文字資料とは何か - 人類文化の記憶と記録 - 」となっています。ところが具体的に出された事例は、ほとんどすべて日中韓に集中しています。COEプロジェクト全体のテーマも「人類文化研究のための非文字資料の体系化」であって、決して「日中韓文化研究のための非文字資料の体系化」ではありません。今までの議論をうかがっていて、何だか日中韓でやることに落ち着いて安心してしまったような、奇妙な印象を受けます。さっきも国際的というのは、中国と日本で問題を調整することだというような発言がありました。ですから今後の課題としては、今日出された問題をお互いクロスさせると同時に、もう少し、ほんの少しでもいいですから視野を拡大するだけで、色々見えてくるものや補正されるものがあると思うのです。

いくつか例を挙げます。セッション2で災いを祓い、福を招く動作についての議論がありました。これなどは、日本と東アジアだけでやっていたのでは、がちがあかない問題だと思います。こういうことは、それこそ人間がいたるところで考えることなんですね。例えばとくに仮面舞踊で災いを祓う、死者がでたり、災いがあった後にそれを清めるという仮面踊りが発達しているアフリカの仮面踊りの動作なども参考にすることによって、東アジアの事例についても、考えるヒントが得られるのではないかと思います。

セッション3の民具と民俗技術のところ、尹紹亭さんが中国の犁の発展についての研究成果を発

表されました。ただ犁を論じるときに繫駕^{けいが}の方法、犁をどうやって家畜に繋ぎ、固定するかということが、広い視野で犁の問題を考える場合には、ここで議論されたように変化や歴史的な系統を考える上でも、きわめて重要な点になります。今日お出しになった、見せていただいた画像ではそれほど明確ではありませんけども、首のところに繋いでいるように見えました。しかしこれは例えば、ヨーロッパの犁というのは、これは西インドか西アジアの系統かもしれませんが、牛の角に直接繋ぐものがあります。それからヨーロッパでも特に北の方ではご承知のように、車輪と、土をかえず跳ね板の付いた犁が主流です。こういうものとの関係で、中国の犁の変化発展をどう位置づけたらいいか。抬杠の問題も出ましたけれど、水牛の抬杠はインドネシアでも古くから発達していて、これが移転されたと思われるマダガスカルでも、水牛による水田の踏耕が比較的最近まで盛んに行われていました。そういう視野で、中国の犁の発展の問題も、比較して考える余地があるのではないかと思います。

同じセッション3での排泄の民俗と民具の発表も、興味深くうかがいました。これは第一に、基調講演で私が申しました身体技法、特に蹲踞^{そんきょ}、かかをつけてしゃがめるかどうかに関わっています。これと排泄の仕方、つまりしゃがんで排泄をすることができるかどうか。かかをつけてしゃがむのは、基調講演でも説明しましたように、脛骨、すねの骨の下の前の端と、距骨^{きょこつ}、足の甲の骨とが作る関節面が鋭角になるかどうかが決め手になります。これは小さい時からの習慣の問題ですけれども、少なくとも現代の西洋人はほとんどしゃがめません。かかをあげた野球のキャッチャーの捕球姿勢のような形ではしゃがめますけれども、かかを床面ないし地面につけて座ることはできないんです。日本から東南アジア、インドからアラブ圏までは、ぴたりとかかをつけてしゃがむ座り方が発達しています。この問題は、日常生活での座具やヨーロッパで発達した分娩椅子など出産の姿勢などとも密接に関係していますし、もちろんこれによってトイレのあり方も変わってきます。腰掛けトイレは、身体技法の基本的な問題とも対応しているので、しゃがめない文化も視野に入れて比較することが大切だと思うのです。排泄は始めに基調講演で申し上げましたように、身体内部の有機感覚、オーガニック・センセーションズ (organic sensations) に関わるもので、性交、分娩、排泄という生物としての種と個体の維持に不可欠の、原則として道具なしでも可能な身体技法にかかわっています。しかしこの原初的で、素裸でもできる排便の仕方、性交の体位、お産の仕方、文化によってきわめて多様です。同時に、潔と不潔をどのように分けるかという、これも文化によって多様な感覚とも不可分です。ですから排泄の民俗と民具は、生活の他の面ともかかわる身体技法や生活感覚に大きな拡がりをもっている、興味深い領域だと思います。

もう一点、質問でも出ました、人間の排泄物を豚の餌にする問題ですけれども、豚の家畜化は世界のいくつかの地域で独立に生まれたもので、伝播ではないと考えられています。ヨーロッパでもフランスの中央山塊や中部ヨーロッパなど、食用だけでなく豚の脂肪を灯火にも使うほど徹底した豚文化があります。アジアとは別系統で生れ発達したヨーロッパの豚飼育文化でも、豚小屋の上に人間のトイレが作られています。ですからこれも、日中韓だけで考えられるべき問題ではありません。

セッション3のコメンテーターの方が民具と民俗技術の関係というのは、道具の人間化のことだと私の発言を引用する形でおっしゃいましたが、私が道具の人間化と言ったのは道具と人間との関係を考える上でのオリエンテーションのあり方の一つとして申し上げたので、道具の人間化、道具の脱人間化、人間の道具化という3つの指向性を、それぞれ日本、西洋、サハラ以南アフリカの技術文化の

特徴として、一種の典型概念としてお話ししたので、決して道具の人間化が人類に普遍的なのではありません。

それからセッション1の写真の図像資料としての利用。これは魅力的で面白かったんですけども、モジャイスキー自身の写真が図の中にあるということについて、西洋ではそういう伝統があるのだろうかという疑問がコメンテーターから出されまして、その時、私がお話では時間がなかったのでごく簡単にだけ発言したんですけども、あの時申しましたように、ヨーロッパ中世の寄進宗教画では、寄進した人とその絵を描いた人の姿が、ちょうどサインのように画中に描かれています。ルネサンス以後の宗教画以外でも、例えばボッティチェリやレオナルドやゴッツォーリの『三王礼拝』やラファエロの『アテネの学堂』などがよく知られていますし、ピーター・ブリューゲルのお父さんの方の有名な『村の婚礼』にも作者の姿が画の中に描いてあります。これはほんの数例に過ぎませんが、こういう例は西洋にもたくさんあるし、日本にもあります。例えば鎌倉時代の中殿御会図^{ちゅうでんぎょかいず}という貴族がたくさん集まったところを描いた絵の中に、それを描いた藤原信実^{のぶざね}の姿が名前と一緒に描き込んであります。こういう問題は私は「肖像と固有名詞」という論文で詳しく取り上げております。他にも例がありますが、参考文献に書きました『人類学的認識論のために』の中に再録されていますので、関心のある方はご覧ください。このフランス語版、*Gradhiva* に載った“Le portait et le nom propre”には、図像資料をもっとたくさん入れて書いております。こういう問題は、図像を資料として使う場合に、その作者との関係で重要になってくることで、図像の取り扱いの上でのごく基礎的な知識として、理解しておくべき点だろうと思います。

最後のセッションで、中国の白庚勝さんも、フランスのジュヌヴィエーヴ・ガロさんも、文化遺産の保存についてお話になりました。ご承知のように、先月10月にパリで開かれたユネスコ創立60周年記念の会で、ユネスコはこれまで世界の文化の多様性を守る努力を一貫して続けてきたということ、記念講演をされたクロード・レヴィ＝ストロース先生も強調されました。そしてそれに先立って開かれた総会で、3年越しで論議されてきた、文化産業の多様性を保護する条約が提案され、賛成148の圧倒的多数で可決されました。アメリカとイスラエルが反対し、アメリカに気兼ねしたオーストラリアなど4カ国が棄権しましたが、30カ国が批准すれば発効します。ただこれは映画などいわゆる「コンテンツ産業」の輸出入に関する条約なので、京都議定書の場合とは違って、アメリカだけが自分を守らないと言っても済まない、つまり輸入国がこの条約を楯に輸入を規制できるところに、画期的な意義があります。文化の多様性の尊重と文化的伝統の保存は、私たちのプロジェクトにとっても関わりの深い問題であります。私も有形・無形文化財保護のユネスコの活動に、いろいろな形で加わって参りましたが、丁度COEの調査で来週から二週間ほどフランスに参りますので、パリに寄った時に、旧知の松浦事務局長と記念講演をされたクロード・レヴィ＝ストロース先生お二人ともアポイントメントが取れましたので、この条約の成立過程についてもお話をうかがった上で、帰国後機会を見て報告をしたいと思っております。〔(注) 2005年12月16日東京日仏会館での講演「いまなぜ文化の多様性か」や、ユネスコ・アジア文化センター発行の『ACCU ニュース』356号(2006年7月号)所収の「いまなぜ文化の多様性か」で、この問題をやや詳しく論じた。〕 以上です。

佐野 川田先生どうもありがとうございました。もう時間が来てしまい、私のふつつかな稚拙な司会で、

まとまるものもまとまらないということになり大変失礼しました。ドブソン先生、グーバー先生、それからガロ先生には大変長いコメントも寄せられていますが、紹介する時間が取れませんでした。後で文面をお渡しします。また後から、福島県立博物館の佐々木長生さんからの質問も来ましたが、時間内に間に合いませんでした。

それではこれで長時間にわたる総合討論を終わります。このたびのみなさまのご意見を参考にして、これからCOEプログラムをさらに進めていきたいと思えます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)